

学位論文題名

エリアーデの思想における「亡命」と「宗教」

学位論文内容の要旨

本論文は3部8章からなる。

第I部は、「歴史の恐怖」、「宗教」、「精神」、「残存・擬装」といったエリアーデ宗教学の主要概念が、ルーマニアの敗戦や社会主義政権の樹立、ルーマニア人亡命者が抱えていた諸問題などとの関連において形成されていった過程を明らかにする。

エリアーデによれば、人間は不条理な歴史過程がもたらす苦難に抗い、そこに意味を見出そうとする本性を有する。この本性をエリアーデは「精神」と呼び、「精神」に基づいて創造された文化的営為が「宗教」であるという。そして彼は、多くの宗教現象が歴史、すなわち超越的な意義を剥奪された世俗的時間から脱出することを何らかの方法によって実現しようと試みる側面に着目し、それを「歴史の恐怖」(への抵抗)という観念で表現した。

奥山氏は、エリアーデの宗教理論におけるこれらの諸概念を、彼の亡命者としての在り方との関連において捉え直す。氏によれば、「歴史の恐怖」の形成にはルーマニアを占領してそこに社会主義政権を樹立したソヴィエトに対する恐怖と危機感が強く影響していた。また、「宗教」と「精神」の形成には社会主義政権によって弾圧された祖国の宗教文化を国外にて存続させるための文化共同体を創設するという目的が影響している。さらに、現代世界における宗教の積極的な役割を論じる「残存・擬装」概念は、宗教文化に抑圧的な政策をとっていたソヴィエトを批判することを目的のひとつとしていたのである。

第一章は、亡命者としてのエリアーデの問題意識と宗教理論の形成過程との関連を解明する。亡命者としてのポルトガル滞在期における『日記』を、「歴史の恐怖」というエリアーデ宗教学の主要概念への言及に着目しながら読むと、ソヴィエトによってルーマニアが占領され、祖国の社会状況と価値観が根底から覆されるという経験が「歴史の恐怖」の概念形成過程に強く影響していることがわかる。また、「歴史の恐怖」は同胞ルーマニア亡命者たちを精神的に支持することを目的として打ち出された概念であることが判明する。ギンズブルクに代表される先行研究においては、「歴史の恐怖」はユダヤ教の歴史観と相反するものとして解釈され、反ユダヤ主義という視点から批判されてきた。それに対して奥山氏は、ポルトガル期における概念形成過程を明らかにすることによって「歴史の恐怖」に関する新たな解釈を提示している。

第二章では、ルーマニア人亡命者組織におけるエリアーデの活動を解明するために、エリアーデが機関誌に掲載した政治的論説を取り上げ、その中で spirit 概念に付与した意義・役割に注目する。パリに亡命したルーマニア人たちの間には、様々な政治的・経済的利害関係に基づく対立があった。そのような状況に対してエリアーデは、個々のルーマニア人亡命者たちの多様な政治的信条や経済的状況を包摂する文化共同体の創設を可能にする

共通価値として、普遍的 spirit をルーマニアのフォークロアや神話から析出した。先行研究ではエリアーデの用いる概念が西欧中心主義やキリスト教中心主義によって歪められている可能性を批判的に指摘する傾向にあったが、本章は spirit 概念がルーマニア人亡命者組織に対して果たした役割を明らかにした。

第三章は、エリアーデが亡命者組織を設立した理念を精査する。それによって明らかになったエリアーデの目的は、亡命者が自民族の利益のみを追求する偏狭な民族主義に陥ることがないように、ルーマニアの伝統文化と他地域の様々な文化とが共有可能な「普遍的」文化を提示することであった。ここでも普遍性への志向は亡命者という存在状況に規定されていたわけである。

第Ⅱ部では、エリアーデの文学作品と亡命者としての政治的問題意識との関連が論じられる。

まず第四章では、エリアーデがヨアン・ペトル・クリアヌとルーマニアの政治や文学論に関しても意見を交換しあった『往復書簡集』に着目する。クリアヌはエリアーデと同じく亡命ルーマニア人であり、シカゴ大学の宗教学講座における彼の後任である。クリアヌはエリアーデとの個人的な交わりを通して、亡命者組織におけるエリアーデの活動をも熟知していた。そのため、エリアーデ思想を包括的に理解するためには、クリアヌの見解は重要な手がかりとなる。クリアヌによれば、エリアーデの文学作品は社会主義政権によって弾圧されたルーマニアのフォークロアや神話を後世のルーマニア人たちに伝えるための文化的手段だったのである。

第五章では、戦前戦後それぞれの文学作品における「精神」(spirit)という語の用例を比較することにより、この語が社会主義政権によって弾圧された宗教文化を後世のルーマニア人たちに伝えるという目的に沿って用いられるようになる過程が明かにされている。

第Ⅲ部は、ルーマニアにおける戦時中の民族主義運動であり戦後ファシズム運動と批判された鉄衛団とエリアーデの思想とが、またソヴィエト・ルーマニアの社会主義政権とエリアーデの思想とがいかなる関連を有していたのかといった問題を扱う。

第六章は、鉄衛団とエリアーデとの関係を考察する。エルサレムのユダヤ系雑誌に、エリアーデは鉄衛団の一員だったと糾弾する記事が1972年に掲載された。この記事は、エリアーデをファシストと断ずる批判が巻き起こる契機となった。エリアーデは生前、鉄衛団への自身の関与について明確に説明することなく、関与を追及する批判者に対しても反論しなかった。エリアーデとクリアヌは、鉄衛団がルーマニアの歴史において果たした役割や功罪について書簡によって多くの議論を重ねていた。それらの書簡を精査すると、鉄衛団をルーマニアの農村文化に基づく宗教運動とみなすエリアーデと、過激なファシズム運動と見なすクリアヌとの見解の相違が明瞭になる。

第七章は、ルーマニアの政治体制をめぐるエリアーデとクリアヌとの見解の相違を明らかにする。エリアーデがルーマニアの神話やフォークロアの研究を通して間接的に祖国の政治に関わろうとしたのとは対照的に、クリアヌは鉄衛団や社会主義政権の政策をはっきりと批判することで直接的に関わろうとしたのである。

第八章は、エリアーデとクリアヌ両者に関するルーマニア本国での先行研究を紹介しつつ、ルーマニア・フォークロア研究におけるエリアーデ、クリアヌ間の見解の異同を明確にする。ルーマニアの宇宙創造神話は、アーリア民族中心主義という政治的イデオロギーを反映するドイツ宗教史学派が提唱する伝播仮説に基づいて研究が行なわれてきたの

であるが、エリアーデはその伝播仮説を部分的に継承する方向性をとったのに対し、クリアーヌは完全に否定する立場で研究を行なった。この相違はそのまま両者の政治性の違いを反映しているのである。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 宇都宮 輝 夫
副 査 教 授 佐々木 啓
副 査 教 授 櫻 井 義 秀

学 位 論 文 題 名

エリアーデの思想における「亡命」と「宗教」

ミルチア・エリアーデ (Mircea Eliade, 1907-1986) の提示した宗教理論は、1970 年代以降、世界の宗教学のなかでも最も主導的な理論の一つとなった。しかし彼が研究の対象とされる際には、英・独・仏語で書かれた彼の宗教学の諸著作がもっぱら取り上げられ、彼の多くの小説、およびルーマニア人亡命者組織の機関誌に掲載された論説や、祖国に残してきた家族や同郷の亡命者たちと交わした書簡などは、まったくといってよいほど顧みられることがなかった。本研究は、それらをむしろ主要な資料として用いている。そして本研究は、エリアーデの宗教理論や文学作品を、祖国ルーマニアの政治的・文化的危機に直面した亡命者としての彼の生活との関連において解釈する新たな見方を提示する。

エリアーデの宗教学は、人類の宗教史の多様性を貫いて見出される形態的類似という普遍性を強く志向している。同じく彼の文学作品も、人類一般が共有できる主題を当然含んでいる。しかし人間の思索が具体的状況を欠いた真空から生ずることはないのであって、エリアーデの普遍的な問題関心と理論は、具体的な生の状態における特定の経験を核として、そのまわりに普遍性をもった理論として結晶化していったと考えられる。彼の宗教理論や文学作品も必ずや特有の「生の座」に根ざしており、生の特殊具体的な状況から普遍性をもった理論や主題として析出してきたはずである。

それゆえ、本研究は、ルーマニア人亡命者組織の機関誌に掲載されたエリアーデの論説や、家族や同郷の亡命者たちと交わした書簡、ポルトガル時代に書かれた『日記』などの文書を読解することで、上述のような過程を解明しようとする。これらの資料には、亡命者としての彼自身の存在状況やそれに関する彼の思索が直接的に反映しており、そしてソヴィエト政府とその傀儡政権による文化破壊の危機に瀕した祖国の同朋に対する（そして無論同朋亡命者に対する）政治的・文化的・宗教的アピールが読み取れるからである。

本論文で奥山氏が研究資料として取り扱ったエリアーデの小説、亡命者向けの論説、個人的書簡などは、彼が母国語ルーマニア語で著した文書である。奥山氏の研究成果として最初に指摘されるべきは、従来ほとんど顧みられて来なかったこの相当量に及ぶルーマニア語資料に丹念に当たり、それを正確に読みこなしたことである。ルーマニアにおいてさえ、こうした俯瞰的作業を実際に遂行した研究者はほとんどいない。

第二に、本論文では、エリアーデ宗教学の中心テーマが戦後のルーマニアの政治的・社

会的・文化的危機状況への応答と対決という形で生み出されていった生成過程が説得的に論じられており、こうした論点の文献的実証をなした業績がこれまでなかったことに照らせば、奥山氏の研究は独自の成果として高く評価することができる。

今述べた点に関連して指摘されるべきことがある。エリアーデの宗教学上の主要諸概念はこれまでそれぞれが単独に研究・解釈され、その過程で内容上の連関が指摘されてきた。奥山氏はこれらの諸概念が亡命者という存在状況とそこで自覚された使命感に発するものと位置づけることによって、それらを（いわば同じベクトルを帯びたものとして）統一的に理解する道筋をつけた。この点も従来には見られない成果だと言える。

最後に、彼の研究視点の独自性は、エリアーデの思想を宗教学という特定の学問領域に限ることなく、総体として捉えていることである。学術的著作、小説、政治的論説、個人的書簡、これらすべてにわたって一貫して見て取れる彼の思索の全体像を明らかにしたことは、従来のエリアーデ研究を明らかに乗り越えている。

ただし、問題が残されていないわけではない。エリアーデの思想の根幹をなす主要諸概念が亡命者としての彼の存在状況と使命感とに緊密に結びつき、そこに根をもっていたとしても、それだけで彼の全思想の一切を割り切ることはやや強引である。その視点からでは説明のつかない主要思想もほかにも多くあるからである。また、エリアーデ思想の知識社会学的な性格を明らかにしえたとはいえ、それとは別に、そもそも彼の学説の妥当性に関して種々指摘されている難点についてはまだ論ずべきことが多くあり、それらに今後十分な検討を加えていくことが課題として残されている。

以上の研究成果を全体として総合的に評価して、本審査委員会は、全員一致で、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしい業績であるとの結論に達した。